□□□□

[illegible]

[illegible]

[illegible]2020[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]2020[illegible]

「結婚できない男」について（弁護士 月岡 朗）

この原稿を書いている今は続編が放送されていますが、私は「結婚できない男」というドラマが好きです。このドラマの主人公は、阿部寛さんが演じる桑野信介（続編では５３歳）という未婚のおひとりさまです。偏屈で皮肉屋な主人公桑野信介の言動と、周囲とのやりとりが面白く、阿部寛さんの傑作だと思っています。

私個人は、おひとりさまや高齢者に関する業務（任意後見契約、民事信託、遺言作成、死後事務委任契約など）をすることが多いのですが、もし、私がおひとりさまの桑野信介から任意後見契約等の相談を受けた場面を想像すると、偏屈な桑野信介の対応には、なかなか苦労するような気がします。独善的で毒舌な桑野信介にあきれてしまうことも、口喧嘩になることもありそうです。もっとも、ドラマのヒロインの桑野信介の主治医や弁護士は、何度、桑野信介と喧嘩しても、ヒロインの立ち位置を維持しているので、私が喧嘩しても委任関係に影響は無さそうです。

「結婚できない男」の続編のインタビューで阿部寛さんが「いろんな人がいて、それを認め合える世の中になってほしい。このドラマを見て、そう考えてもらえたら、うれしい。」と話している記事を見ました。本当にそのとおりだと思います。結婚する・しない、子供のいる・いない等、人との違いを気にせずに、周囲の人とつながりながら暮らすことができれば、素敵なことだと思います。「結婚できない男」のさらなる続編を期待しています。

弁護士 月岡 朗

（事務所ニュース・2020新年号掲載）

広がる「終活」（弁護士 谷川 聖子）

私はわりと引越の経験が多いほうです。弁護士になってからは、４回引越しました。引っ越すたびに、窓から見える風景、通勤経路も変わり、自然と気持ちが改まりました。新しい部屋の周辺をぶらぶらしながら、面白そうなお店や、綺麗な公園を発見するのは楽しいもので、引越は嫌いではなかったのです。でもそれは、昨年までのことでした。昨年の引越で大量の物を目の前に、初めて途方に暮れました。比較的長く住んでいたのですが、この部屋のどこにこれほど沢山の物が？ 結局多くを廃棄処分し、地球に厳しい自分の存在を認めざるを得ませんでした。

引越ではないですが、遺された人にこのような思いをさせたくない、あるいは周りに頼める人がいない、という方から、自分の死後、必要

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]2020[illegible]

[illegible]

SNS[illegible]SNS[illegible]LINE[illegible]LINE[illegible]SNS[illegible]

[illegible]SNS[illegible]SNS[illegible]

[illegible]

[illegible]SNS[illegible]

[illegible]

（事務所ニュース・2020新年号掲載）

自動運転に思う。（弁護□ 高木□太郎）

シェアリングエコノミーに関する話を聞く機会があった。①ウーバーのような配車サービスのプラットホーム、②自動運転の技術進歩、③車は所有しなくても良いと言う意識変化。これらが相まって、１０年、２０年後には、車は単なる移動の手段となり、人は車を所有せず、スマホで呼ぶと自動運転のレンタルカーが配車される。愛車を所有する人は、今で言う手動の一眼レフカメラを愛用する趣味人に限られるようになると言うのである。私の感覚では①②は実現しても③は変わらないと思ったが、若い世代に話を聞くと、車は所有しなくても良いと言うのである。

①のウーバーは、個人の所有車両をウーバーの支配するネット機構を通じて配車するシステムである。運転手は実態は労働者なのに、労働法の保護が受けられないとして、導入された欧米では激しい批判にさらされ「運転手は労働者」とする裁判なども出ている（日本では白タク規制で実現していない）。自動運転への変化の過程で人間をモノ扱いしていくのだから、猛烈な搾取になるのは当然の結果か。妙なところに納得しつつ、今年も「人間の権利」のために頑張ろうと思う。

弁護士□高木□太郎

（事務所ニュース・2020新年号掲載）

伝える、伝わる（弁護□ 鈴木□満）

昨年は、日本にいる外国人問題に関する情報を発信させていただく機会が多かったように思います。
いのちと健康を守る埼玉センターや埼玉弁護士会での学習会の講師をさせていただきました。また、「第３９回全国クレサラ・生活再建問題被害者交流会」というシンポジウムの中で、外国人問題に関する分科会の責任者をやらせていただきました。
事務所内の会議でも、外国人問題に関する発言の機会が多かったように思います。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]2020[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]2020[illegible]

ヒーローはいらない（弁護□ 古城□英俊）

昨年は、ラグビーワールドカップが日本で開催され、大いに盛り上がりました。大きな相手にも怯むことなく激しくタックルに入り、時には２人で突進を止める。日本の主将が「ヒーローはいらない」と言っていたように、選手一人ひとりが、愚直に、自分自身を犠牲にして役割をやり遂げ、縁の下の力持ちとなってこそ、ボールを奪い、確保し、得点につなげることができる。選手全員の同じ目的を持って、その力の結晶として得点が生まれる、ということがとてもよくわかるスポーツだったのか、それまで興味を示さなかった家族も、熱狂しました。

弁護士の仕事でも、弁護団事件では、一つの目的（勝訴）のために、原告、支援者、弁護団などが力を合わせてたたかうことがあります。２０１３年から３年間にわたり平均６．５％、最大１０％も生活扶助基準が引下げられたことに対する違憲訴訟も、全国２９の都道府県の裁判所で集団訴訟が続いています。１０００名以上の原告と、全国各地の支援者、弁護士が力を合わせてたたかっています。埼玉の訴訟は、終盤にさしかかり、今年は証人尋問・原告本人尋問が行われる予定です。
私も弁護団員の一員として、奮闘したいと思います。

弁護士□古城□英俊

（事務所ニュース・2020新年号掲載）